小 学 校

平 成 5 年 度

教育研究員研究報告書

図 画 工 作

東京都教育委員会

平成５年度

教育研究員名簿（図画工作）

分科会	地区	学校名	氏名
A分科会	渋谷区	長谷戸小	海口解子
	中野区	東中野小	高橋孝子
	北区	西ケ原小	中村芳子
	足立区	六木小	△ 濱方克彦
	葛飾区	葛飾小	三浦百合子
	江戸川区	南葛西第三小	小川百合
	立川市	大山小	□ 永井和貴
B分科会	墨田区	外手小	○ 多賀洋美
	品川区	戸越小	□ 河鍋典子
	大田区	志茂田小	山口眞生
	世田谷区	三宿小	◎ 桃井巴
	杉並区	杉並第九小	福島まゆ子
	練馬区	仲町小	△ 仙北屋順子
	八王子市	横山第二小	藤原初代
	三鷹市	第四小	相沢待子

◎全体世話人　○全体副世話人　□分科会責任者　△分科会副責任者

担当課長　小島　宏　教育庁指導部初等教育指導課
担当指導主事　清水満久　教育庁指導部初等教育指導課

研究経過　4，5，6月　研究主題の設定，研究内容と方法の検討，研究授業
7月　研究仮説，副主題の設定，分科会の編成，研究授業
8月　御岳研究集会（研究全体構想，事例報告等）
9，10，11月　実証授業及び検討，研究報告書作成
12，1月　実証授業及び検討，発表内容の検討，授業案の検討と作成
2月　研究発表会（渋谷区立長谷戸小学校）

目　　次

Ⅰ　研究主題 …… 2
1　研究主題設定の理由 …… 2
2　研究の概要 …… 3
Ⅱ　研究の内容 …… 4
1　研究の内容 …… 4
2　研究の全体構想図 …… 5
Ⅲ　分科会の取り組みと実践事例 …… 6
1　Ａ分科会〈多様な表現を引き出すための題材設定の工夫〉 …… 6
(1)　具体的手だて
(2)　子供の多様性を引き出す提案の工夫（子供の多様な活動の実態記録）
実践事例 …… 8
①　「こねこね・ドロドロ」（第３学年）
②　「穴から広がる私の幻想」（第５学年）
③　「ためしてチューブ　変身いろいろ」（第４学年）
(3)　ま と め …… 14
2　Ｂ分科会〈多様な表現を引き出す支援の工夫〉 …… 15
(1)　具体的な手だて
(2)　実態調査について（題名の変化の例）
(3)　実践授業への問題提起・「叫んでみたら……。」（第６学年）
実践事例 …… 18
①　「夢のスポンジック・パーク」（第４学年）
②　「いちょうの枝から生まれる生まれる……。」（第５学年）
Ⅳ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

Ⅰ 研 究 主 題

一人一人の思いを生かし，多様な表現を引き出す題材の工夫と教師の働きかけ

1 研究主題設定の理由

今，私たちを取り巻く社会は，多様な情報，多種の製品が溢れている。また，日本は高学歴社会といわれ，知識や技能に偏った教育が進められてきたと指摘されている。そのために，知的水準の高さとともに受動的な子供や，無気力・無関心な子供，個性の乏しい子供を生み出してきたのではないかと考えられている。

本格的な高齢化社会，国際化社会を迎え，生涯学習時代を生き抜く子供たちにとって必要なのは，主体的に生きようとする意欲などを含めた，生きて働く能力である。そこで，子供たちが自ら学ぶ意欲と，社会の変化に主体的に対応できる能力や，思考力，想像力，表現力などの能動的な能力を育てる学校教育の在り方が問われている。このように，学校教育の質的転換が求められていることから，表現活動を中心とした図画工作科に期待されているものは，きわめて大きい。

本来，子供たちは，一人一人多様でそれぞれによさがあり，内面に秘めている子供にしかない感性(価値あるもの)がある。それは，発見の喜びや新しいものへの興味（刺激に対する敏感さ），伝えたいという欲求（表現欲求），想像の幅などであり，子供たちは，我々大人より遥かに新鮮な感覚をもっているのではないだろうか。しかしながら，このような子供の豊かな感性は，既成の概念や画一化された表現方法などにとらわれ，表現活動の中で自由に生かされていないのではないかと思われる。そこで私たちは，子供たちが本来もっている感性で，自らの表現欲求を発見し，体験的な活動の中で思考を深め選択する能力を高め，豊かな自己実現を果たすような支援をしたいと考えた。本研究では，社会の変化に主体的に対応していく子供を育成する立場から，図画工作科として次のようなことを重視することにした。

(1) 多様な感覚を働かせ，事物の美しさなどを敏感にとらえることのできる感性や，自分なりの思いで構想すること

(2) 自らの体験を基に，自らの目的に向かって工夫する力

(3) 自分なりに見出した価値あるものを認め合う心

以上のような観点から，本研究では，子供の内発的な欲求から生まれる一人一人の思いを生かし，多様な表現活動へと展開できるような題材の工夫と教師の働きかけを模索することにし，上記研究主題を設定した。

2　研究の概要

子供は本来，自分なりの思いや願いをもち，よりよく表現したいという意欲をもっている。それは，授業の中で時としてすばらしいひらめきのある発想として発揮されるが，いつもそのように表出されるとは限らない。中には自分の思いや願いに気付かずにいたり，ひらめいても表現として構成できないままに過ぎてしまったりする子供も多い。そこで，主体的な活動を行うためには視覚・聴覚や触覚などの感覚を十分に働かせて，一人一人の思いを表出できる造形活動の展開が大切になってくる。このような活動の中で子供は「表現したい」意欲をもち，「表現できそう」と見通しをたて，「表現する」ことができ，「表現できた」と満足感を味わうことができるようになると考えた。

それでは，主題として掲げている中で，多様な表現とはどのようにとらえたらよいのだろうか。子供は一人一人の顔が皆異なるように，それぞれの好みや見方，感じ方などが違い自分なりの思いをもっている。自分なりの思いをもつことが個性のめばえであり，個性にねざした造形活動を行う中でそれぞれの子供に多様な表現を可能とする。このような多様な個性が生かされた造形活動の中で子供は一人一人が様々な試みや発見をし，表現する楽しさを味わうであろう。つまり，一人一人の思いを表現活動に生かすには，子供の多様な表現を引き出す題材の設定や支援の工夫が重要であると考えた。

そこで，研究テーマに迫り多様な表現を引き出す手だてとして

①　子供のもつ感性を大切にし多様な活動を引き出す工夫

②　個に応じた多様な造形活動に対応する支援の工夫

が大切であると考えた。

また，多様な表現を引き出すには，子供のもつよさ・個性の表れである創造的活動を促進するための教師の働きかけが大切である。第一に教師が子供一人一人の感性のすばらしさを感じ取り，子供に気付かせるための支援であり，第二には子供の多様な感覚に働きかけ，全身を使った体験的活動を通して表現し，自己表現できるように人間関係や物的環境を整えることである。このことにより，子供が安心して試しながらつくることなどが表出の雰囲気が授業の中にでき，多様な表現を引き出すことができると考えた。

以上，本研究は授業改善のために二つの分科会，Ａ分科会「多様な表現を引き出すための題材設定の工夫」・Ｂ分科会「多様な表現を引き出す支援の工夫」を設定した。それぞれの分科会が仮説をもって研究を進める中にも相互の関連を図り，多様な表現を引き出す指導の工夫についての課題の解決をめざした。

Ⅱ　研究の内容

1　研究の内容

研究課題の解決を図るため，A・B両分科会ではそれぞれがテーマをもち，下記のような内容で研究を進めてきた。

A分科会　多様な表現を引き出すための題材設定の工夫

子供たちの感覚は，大人のように概念化されたものでなく，直感的であり，ものや空間に敏感に反応する。さらに，子供たちは，普遍的な感性とそれぞれの経験の積み重ねとから言葉にできない渾沌とした世界を内面に潜在させている。子供たちの内に潜む表現欲求を，物と関わることにより刺激し，感覚を響かせ，技術中心の概念的な再構成でない，本来の表現・造形活動として発揮することが重要と考える。そのために，「子供の感性を大切にすること」「素材の工夫」「子供の活動の自由性の尊重」など，題材の工夫を柱に考えてみた。

物には物の強い個性があり，その物質の材質感などの特性との直接的なかかわりが，子供の感性（多様な感覚）を刺激し，フレッシュなイメージの発生を導く。そして，その物質的な世界を，イメージの変容，表現・造形活動として広げていくのである。このような，子供の感性と素材のかかわりと，子供の創造的な自由な活動との結び付き・バランスが重要であり，その結び付きの場を子供たちに保障していく役割を我々教師は担っている。そのために，わたしたち教師自身も感性を磨き，題材の工夫をし，子供たちに提案していきたい。

B分科会　多様な表現を引き出す支援の工夫

子供の造形表現の過程での教師の働きかけが工夫されれば，子供らしいひらめきや新しい発想，想像の世界のひろがりといった創造的でより多様な表現が構想されるであろう。子供の造形活動を主体的にするために，子供が安心して造形を試しながらつくることなどができる雰囲気をつくりだすことが重要であると考えた。

そこで，具体的手だてとして3つの視点から研究を進めることとした。①「時」についての支援の工夫である。この中で造形活動時間の個人差への対応を考えた。弾力的な計画を工夫することで子供の思いをあたためることができるであろう。②「場」についての支援の工夫である。展示や掲示，材料・用具・活動場所等の設定を工夫すると子供が発見や試みをしたくなるであろう。③「人との豊かなかかわりあいを育てる」工夫である。教師からの共感的・受容的な言葉がけ，友達同士の認め合いなどから，子供は自信をもつことができ自己実現を図っていくであろう。以上のような視点から子供の主体的な造形活動を授業の中心に置き，多様な表現を引き出す支援の工夫を追究することを研究の中心とした。

2　研究全体構想図

研究主題

一人一人の思いを生かし，多様な表現を引き出す題材の工夫と教師の働きかけ

子供の実態

豊かな感性や多様な個性をもっている
表現欲求が強く造形への関心が高い
思考，価値観などの画一化
受動的姿勢
情報選択力の低下
実体験や創造的活動の場の不足

育てたい子供の姿

「表現したい」を見つける子
「表現できそう」と高まる子
「表現する」を決断する子
「表現できた」と感じとる子

A分科会　テーマ
多様な表現を引き出すための題材設定の工夫

B分科会　テーマ
多様な表現を引き出す支援の工夫

仮　設・手だて

子供の感性を刺激するような題材を提案することにより多様な創造的造形活動ができるであろう。

・内面への刺激により感性を引き出す題材の工夫
・多様な表現に結びつき，それに対応できる素材と提案の工夫
・感性を生かし，多様な造形活動のできる題材の工夫
・多様な表現活動に対する自由性の尊重

仮　説・手だて

安心して試しながらつくることなどができる表出の雰囲気をつくり出し，子供が感性を働かせて活動すると，感動や興味がわき多様な表現活動を行うであろう。

・子供の多様な活動に対応できる弾力的な時間設定の工夫
・子供が自由に活動できる場の工夫
・安心して試しながらつくることなどができる雰囲気や人とのかかわりあいを豊かにする工夫

主体的な造形活動による創造性に根ざした自己実現

自らのよさに気付き，環境と豊かに関わり，自らを育んでいける子
自他の違いに気付き，認め合いながら自己を高めたり深めたりできる子

Ⅲ　分科会の取り組みと実践事例

1　A分科会　多様な表現を引き出すための題材設定の工夫

(1)　具体的手だて

図画工作の授業の中で，子供たちが個性に満ちた多様な表現を生み出そうとした時，何がその授業を支えるものとなるのであろうか。A分科会ではそれを，題材とのかかわりから，一人一人の子供が独自のイメージを造形としてつかまえていける活動が十分できるようにしていくこととととらえた。具体的な手だてとして

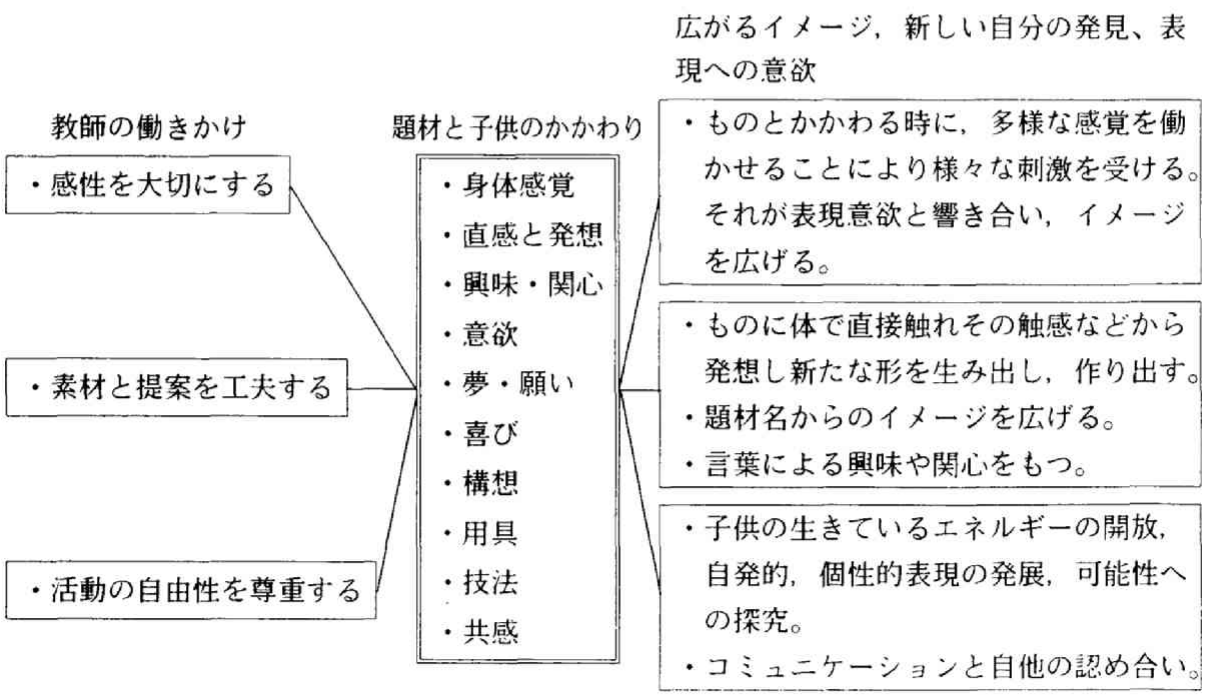
・子供が直接「もの」とかかわり，「多様な感覚」を働かせ，自分自身の感性に響いてくるものを十分に味わいながら表現活動ができる素材や材料を考えることが大切である。

・授業における教師の提案そのものが，自分なりの表現を創造していく上で大きな影響があるので，「素材との出合わせ方」が同時に大切である。

・子供たちの活動は，「おもしろそうだ」（興味関心），「やってみたい」（意欲），「こうやろう」（構想）と活動の中からイメージがはっきりし，表現の手法や手段が決められていくのであることから，自由な活動が十分できるようにしていくことが大切であると考えた。

この様な子供たちの活動の流れを，教師の意図によって規制していくことは，子供自身の思いや願いが失われ，形だけの活動や表現となってしまうのではないだろうか。

――テーマにせまるための三つの柱――



(2) 子供の多様性を引き出す提案の工夫（子供の多様な活動の実態の記録）

① 物（材料等）とのかかわりにおける感性（身体感覚と内面的部分）を刺激する工夫

教師の提案	お好み焼きのもとを練ろう	黄ボール紙の上に広げてみよう	絵の具と筆で自由に表現しよう （ねんどの上に，まわりに，黄ボール紙に，……等）
子供の活動	液状紙粘土をこねる 毛糸をきざむ まぜる こねる	薄く広げる 山にする 何かの形にする かきまぜる 毛糸を寄せる 塊を数個つくる	ドロドロの質感 偶然できた痕跡 毛糸の痕跡 グルグルかき 混ぜる動作 → 樹液と虫，動物の競争 うさぎ，パンダ，ミッキー， ぞう，くま，ねこ，おばけ， コアラ，島，木，虫，ゴジラ， 牛，花，家，亀，ＵＦＯ， 野原にうさぎやねこ，虹，森，

② 多様な表現要素や広い選択の幅をもたせる工夫

	主題	表現内容	素材・用具	技法・方法	仕上げの決定	コミニュケーション
教師の提案	覗いてみたい穴	穴の外側と空間と内側 私の秘密	絵の具，パステル，カラーペン ミラー，画用紙，カラーワイヤー	ダンボールを立てる 目隠しでミラーに描く	内側と外側の調和	言葉のイメージ遊び 呟きを聞く 個を取り上げて紹介する
子供の活動	壁の穴 時間の穴 口の穴 鼻の穴 おなかの穴 ブラックホール	ねこねこワールド 大人の自分と子供の頃 時間と空間の世界 過去と現在 現実と夢	ビーズ，セロハン，ビー玉 写真，綿，貝殻，糸 雑誌の切抜き プラスチック容器，その他	ぼかし，滲み、重色、点描、 スポンジで， 指で，描く 試し紙を使う 接着の工夫 ダンボールの形 ミラーの写し方の工夫	接着方法の工夫 付け足す， 修正する 穴をあける， 描き足す 切り取る	情報交換 材料交換 技法， 方法の交換

③ 素材との出会いから，自由な活動に広がりや，深まりをもたせる工夫

教師の提案	教室内の空間に，チューブを吊したりつなげたりしておく（環境）	題材名「ためしてチューブ，変身いろいろ」

――それぞれの場面での子供の選択――

発想(出会いから)	活動	材料	用具	仕上げの感想
何かをつくりたい こんなことをしてみたい 触れて 見て やって 感じる	チューブに…… つける，はる，描く，穴をあける，通す，まく，蓋をする等 チューブを…… 切る，つなげる，結ぶ，割く，立てる等	アルミ線，ビーズ，クリップ，ねじ，油粘土，水，セロファン，シール，アルミホイル，亀甲網，防虫網，フェルトペン，カラースプレー，ビニルテープ，自分で考えたその他のもの	カッター，はさみ，のこぎり，きり，ペンチ，電動糸のこ，接着剤，ホッチキス	初めから考えていたものができた。 つくっているうちに、途中から思いついてつくった。 思ってもいないものが，できたが，おもしろいものになった。

実 践 事 例

① 題材名「こねこね・ドロドロ」　　3学年（A分科会）

1．題材設定の理由

子供はそれぞれ異なった環境の中で様々な体験をし，豊かな感情を育くんでいる。また，その中で培った能力を発揮して自分の思いや願いを表現したりする存在である。このような子供たち一人一人に潜在する表現欲求を刺激し内面からのイメージの発生を導くために感性（多様な感覚）と物質との直接的なかかわり合いを工夫し探ってみたい。そのために題材の子供への提案に際しては，創造的な自由な雰囲気に心がけて子供が主体的に造形活動に取り組むようにした。今回の授業では，子供の感覚の中でも特に触覚を中心に考えた。言語や視覚だけから伝わる感覚・知覚・認識などは，表面的であったり限られたものになりがちである。言語や視覚だけでは表現不可能なことや無意識の内にあるものに対しては，触覚を中心にした子供の身体全体の感覚を刺激することで表現欲求を喚起し，イメージをふくらませ表現活動を広げ深めていきたい。また，教師からの材料の提供や題材名の提案などを子供の表現欲求への抵抗感として考えた。子供がその抵抗感を乗り越えながら造形活動をする中でこそ創造的な活動の自由を得ることができ，物とのかかわりにおいて感性を発揮して楽しさを味わうことができると考えた。液状紙粘土をこねる感触，毛糸を切りきざむ操作や感触，毛糸と液状紙粘土をこねる・まぜるなどの操作，紙の上に器から流しこぼす操作，スプーンで広げる操作と感触などを大切にして，素材の量感・質感などの感触を重視して関わらせることを通して子供のイメージを引き出していくことを目指す。そして，子供がいかに自分の見方や表現の仕方を高めていくかを見守りたい。

2．題材のねらい

・素材と十分にかかわり、物の特性に触れ，そのよさを体感する。

・素材から受ける量感や質感などを，触覚を中心とする多様な感覚で味わい発想したり，造形したりすることを楽しむ。

3．学習の流れ（3時間）

（第一次）①給食の古い容器に液状紙粘土を入れ，その中に毛糸をはさみで切りきざみながら入れ割箸でこね，混ぜる。（「お好み焼きのもとをつくりましょう」）

②毛糸の色・長さ・太さを選び，工夫しながら思い思いに混ぜる。（粘土と毛糸を好みのかたさ，柔らかさにこねる。）

（第二次）①容器の液状紙粘土・毛糸を黄ボール紙の上に流し，スプーンで広げ割箸で混ぜる。

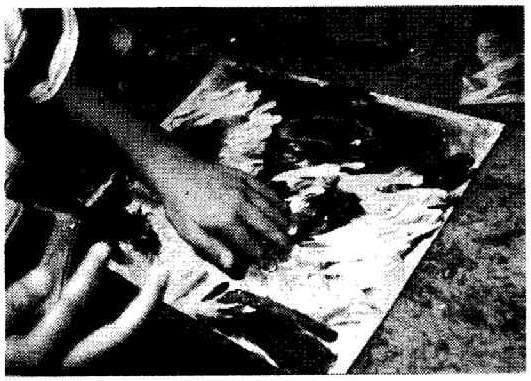
②液状紙粘土を紙いっぱいに広げる。いくつかのかたまりをつくる。丸くする。毛糸を寄せたり，広げたりし，お好み焼きを焼く感覚で，各自思い思いに液状紙粘土と毛糸と十分にたわむれて，その感触をたっぷり体感する。

（第三次）①粘土を広げた時にできる痕跡，質感，毛糸の痕跡，混ぜる動作などから，多様な感覚を働かせてイメージを広げ，絵の具を使って自由に表現していく。

（液状紙粘土を混ぜる要領で，絵の具をまぜていく。）

（黄ボール紙の残っている部分を絵の具でぬってみる。）

（動物，鬼，野原等，絵の具で描いていく。）等



4．考　察

子供たちは，ドロドロした粘土の質感を，毛糸をこねることで十分味わっていた。そして，粘土を流し，スプーンや割箸で広げる，のばすという操作をとおして質感をより深く体感していた。「お好み焼きを鉄板に流す要領で」という教師の提案に，薄く広げる子，山のようにこんもり盛り上げる子，何かの形を表現した子，小さなかたまりを幾つもつくった子，ただひたすらぐるぐるかき混ぜる子，と様々であった。さらに「絵の具を使って自由にやってみたら。」との提案に，絵の具を色々と使って多様な表現をうみだした。それは，白い画用紙の上での絵の具の表現とは全く違った表現であった。ドロドロとした質感から発想して主題にした子，偶然にできた粘土の痕跡から発想して何かの形に表現した子，毛糸の痕跡から草原・野原にし動物を描き加えた子，ぐるぐるかき回し続けその操作を楽しんでいた子と液状の粘土の特色を生かし，多様な感覚を働かせてイメージし，自由な表現活動が展開された。

次の授業では，スプーンや割箸は使わず，手で直接液状紙粘土に触れてドロドロこね，絵の具で多様に表現することを子供たちに提案してみた。同じ液状紙粘土と直接“手”で関わり感触を楽しんだことにより絵の具の表現に大きな違いが見られ，子供の感性を刺激する素材との自由なかかわり方を工夫することが大切であることを実感した。

② 題材名「穴から広がる私の幻想」　　5学年（A分科会）

1．題材設定の理由

子供たちの思いを引き出し，多様な表現活動を尊重していくためには，まず子供たちが意欲を喚起するような題材（新鮮な，または魅力ある題材）の工夫が大切である。次に，子供たちが自分のイメージを表現していくための構想や方法，素材などを自ら選択できるような，幅をもった題材の設定が必要である。また，子供が題材と出会う時に，それまでの素材経験や技法経験などの既習体験が大きくかかわってくるものであり，子供たちの経験を生かした題材を工夫することが大切である。そしてさらに，子供が題材との出会いから自己実現を果していく過程において，一人一人の思いやつぶやきを聞き，温かく見守り，支援していくような教師の柔軟な姿勢や，環境づくりが求められている。

今回の授業では，前回の題材で自己のイメージを抽象的な形や色で表現することを通して，絵の具の滲みやぼかし，スポンジの効果，パステルの重色効果などの経験をさせ，この題材では，「覗き穴」を発想のきっかけとし，子供の思いや自分でも気付かなかった感性や，感覚などを引き出し，子供が表現内容や方法を選択し，穴から覗いてミラーに写る裏側の世界を自由に自分なりの思いで表現することを目標としている。

2．題材のねらい

・課題（穴）から具体的なイメージを引き出し，活動する。

・自他の表現の違いに気付き，そのよさを尊重し認め合いながら，自分らしい表現を楽しむ。

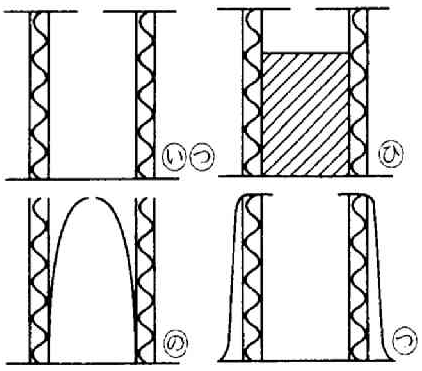
・素材の特性を生かしながら，自分のイメージにあった材料や方法を吟味し，活動する。

3．学習の流れ（6時間）右ページ参照

4．考　察

この題材で，子供たちは，まず穴ということと覗くということに大変興味をもった。そして自分なりに主題を決めるのは初めての経験であったが，表現していく中で自分に合った技法を見付けたり，いろいろな方法でやっていくうちに表現内容が明確になっていったりした。この授業を通して，子供たちの発想や活動の幅広さや，多様さを痛感した。そして，子供たちの既有の体験と表現は，大きく関わっていることが分った。授業の中での素材体験や技法体験などの場の設定や，コミニュケーションを通して，イメージを膨らませるための環境づくりなどについては，今後の課題として考えたい。

子供の活動タイプ記号	教師のかかわり方記号
ひひらめきタイプ　つつみ上げタイプ い行き戻りタイプ のつまづき乗りこえタイプ	見見守る　頷頷く　聞聞き届ける　認認める　促促す 共共感する　励励ます　褒褒める　伝伝える 援援助する　助助言する　投投げかける　説説明する

子供の活動		教師の働きかけ
思いついた事を口々に話す。(口の穴，壁の穴) 穴からイメージする情景をスケッチする つい いろいろな技法でやってみる つい 試し紙で技法を確かめる つ　画面に直接描き始める ひの おもいきりなぐりがきする ひの 慎重にペンを動かす つい 点で表す つい ダンボールを切る 長方形つ　半円形 つい 三角形ひ　波型ひ　多数ひ ワイヤーでバネをつくる ついひの ワイヤーをあむ つい 写真、シールを貼る つひ 友達と見せ合い情報交換をする いの ダンボールに情景を貼る つ  色画用紙等を貼る ひ情景の周りに描き足す ついの 色がきれい つい　仕掛けがおもしろい つひ	提案1 覗いてみたい穴を想像してその情景を表そう 提案2 覗き穴の裏側を写し出す ミラーに目隠しで描いてみよう 提案3 穴の秘密を写し出すための空間をつくろう 提案4 穴の秘密を表そう 提案5 穴の情景と穴の秘密を合わせて仕上げを決めよう 提案6 作品鑑賞会をしよう	頷認共褒思い付きのよさに共感する 助励説イメージが広がるような言葉掛けをする 見促助励褒自分の表したい内容にあった描材・技法・方法が選択できるようにする 説目隠しマスクのつくり方提示 伝失敗した時は，アルコールでふき消せることを伝える 伝ダンボールを立てて空間をつくることを伝える 励褒伝認投他と違う発想を取り上げ紹介する 認援見思い付きのよさを認める 聞共励つぶやきを聞きながら子供たちに寄り添う 援失敗感をもった子供には，やり直しが出来るように援助する 認励見促助頷 作品のバランスを考えて一人一人が仕上げの決定が出来るようにする 褒認聞共促自分の作品の完成に満足しそれぞれの違いに気付き，そのよさを相互に感じ取れるようにする

③ 題材名「ためしてチューブ　変身いろいろ」　　4学年（A分科会）

1．題材設定の理由

自分なりの表現で楽しく活動しようとする気持ちは，全ての子供がもっているものである。日頃の学習の中で，一つのテーマ，あるいは材料を提示した時に，それが幅のあるものであればあるほど，子供は視覚的，感覚的表現のみにこだわらず，思いのまま主体的に表現活動をすることが多い。また，そのような場面においては，お互いに友だちの活動や作品について素直によさを認め合ったり，教師が気が付かないような細やかな発見をすることもある。

そこで，学習活動の中で，先ず自分なりの表現で生き生きとした活動が展開できる場をつくりたいと思った。そして，子供が互いにそのよさを認め合いながら，個々の表現の向上を図れるような活動にしたいと考えた。自らイメージをもち造形的に具体化できる素材と出会う提示の方法を工夫することは，子供一人一人の多様な表現に直接つながるものであると考えた。

チューブ（ビニルのホース）という素材については，固定されたイメージをもちにくい材料として選んだ。子供のもつイメージを更に広げるため，チューブや網等の素材をダイナミックな方法で提示することにした。また，さまざまな用具を自由に使えること，使いたい材料を思いのままに組み合わせること等によって，子供のもつ内面的な欲求が表現活動としてあらわれるであろうと考えて，この題材を設定した。

2．題材のねらい

① 素材から発見し，発想する。

② 形を変化させる方法に気付き，自分なりの方法で活動する。

③ 自他共に表現活動や作品のよさを認め合う。

3．指導計画

（第一次）○素材からイメージし，何をしたいかを見つける。

〈素材提示の工夫〉―〈素材に触れる〉―〈他に使えそうな材料を探す〉―〈用具を選ぶ〉

（第二次）○自分なりの方法を試しながら造形活動をする。

〈発想から方法や手段を考える〉―〈確かめる，失敗，試行錯誤から方向をつかむ〉

（第三次）○自分の作品に題名をつけ，工夫した点を発表し合い鑑賞し合う。

〈充実感・満足感を味わう〉―〈自他を認め合う〉

4．考　察

教室の入口に構える，吸い込まれそうな太いチューブ，天井をはうチューブ，水の流れるチューブ，細くかわいらしいチューブ，ハンモックのようにつるされた網等の工夫された素材の提示に，子供たちの期待感はかなり高まっていた。さらに，素材に直接触れ，その重さややわらかさ，量感などを確かめたり，チューブの中を流れる水が天井を伝わる様子を眺めることで，一人一人が思いをはぐくんでいた。導入の時の「何をつくりますか？」ではなく，「何をしてみたいですか？」という問いかけで，子供たちはリラックスし，意欲が急激に高まった。形のイメージがつかめた子も，つかめない子も，「こんなことをしてみたい」「こんなものをつくりたい」と発想がさらに広がった。。また，無意識に持ち込んだ材料と製作を進めるための用具を活用して，自分のやってみたい方法で素直に素材に立ち向っている姿がみられた。そこには，友達を意識したり，比較する様子は全くと言ってよい程見られなかった。

子供たちは，微妙な透明感のあるチューブの上に美しく光る材料を丹念に並べて接着していく。太いチューブに1㎝程の穴をあけるため，20分もきりとカッターで挑戦する。チューブの中に入れた水を漏らさぬように試行錯誤の後，油粘土でふたをした。ひたすらチューブの内側にこだわり，中の世界を追求する。そのような行為の一つ一つが子供たちの感性を通した体験となり，自分なりの方法，自分で選んだ方法として，心の満足感をもつことができたと考える。また，それが表現への自信となって活動を支えていたのではないかと考える。

次時に続きの授業を行ったが，子供たちは更に新しい発見をし，様々に形を変えて活動は膨んでいった。「何をしてみたいですか？」という問いかけから，子供たちは，目的にそって決められた方法で造形活動を進めるのではない，広がりのある活動が展開された。あくまでも独自の世界を展開していく子供たちの活動に基づいた，題材を設定することの大切さを改めて感じた。

(3) まとめ

A分科会では，・感性を大切にすること。・素材と提案の工夫をすること。・活動の自由性を尊重すること。という三つの柱を手だてとして，三つの研究授業を実施した。そこで明らかになったことを成果として，その成果と課題を下記の表にまとめた。

この研究授業を実践するにあたっては，教師が子供の実態にあわせて題材を設定したり提案をするなどの工夫をした。授業の中では，平面的な表現や立体的な表現においても抽象的な表現方法をとったものが多かった。これは，子供の感性を刺激して素直な形で思いを表出させるのには，既成の形の再現に目を向けさせるのではなく，感情を自由に表現することを重視したからである。子供たちは，素材や題材名の提案と同時に投げかけられた教師の言葉とかかわる過程で，感性を発揮しイメージを広げ，夢中になったり不安になったりしながら個性に満ちた表現活動を展開した。そして，自分の思いを作品として完成させるおもしろさを味わうことができたと考える。

題材名	成果	今後の課題
こねこね　ドロドロ	・素材を多様な感覚で味わい楽しむ中でその質感や痕跡，それに関わる操作により，表現欲求が刺激され，造形的なイメージが広がり表現の内容を深めることができた。	・素材とのかかわりにおいて，表現をさらに発展させるためには，直接手で触れさせたり，全身で関われる大きさにするなど工夫する必要がある。
穴から広がる私の幻想	・自分なりの主題や材料や表現方法の選択は自分の考えで行い，自分の思いを温めていくことができた。また，個々の主題を自分なりに広げ発展させていく事ができた。	・体験ずみの材料や技法については発想の広がりが見られたが，初めて出会う素材や技法においては，つまづきがあった。
ためして　チューブ 変身いろいろ	・教師の提案などの刺激に対し敏感に反応した。試行錯誤しながら自分なりの表現の方法が認められる事が自信となり活動に広がりが出て独自の世界をつくりあげた。	・様々な材料や用具を使う場面では使い方や技法にとまどっている子供がいた。教師の支援と子供の挑戦したい欲求のバランスを図る必要がある。

以上のことから，A分科会で上げている三つの柱は，図画工作教育の基本とも言えることである。この柱を重視して，子供の多様な表現を高めることが大切であると考える。

2　B分科会　多様な表現を引き出す支援の工夫

(1)　具体的な手だて

B分科会では，実態調査に基づき，子供が表現活動の中で安心して試みたり，一人一人の思いを表出することのできる雰囲気をつくり出すことにより，子供の多様な表現を引き出せると考えた。そのために，次の3点について授業を通して主題にせまろうと考えた。

①　子供の多様な活動に対応できる弾力的な時間設定の工夫

ア　具体的なイメージをつかみ構想していく段階での時間設定

・感性を刺激する多様な素材とのかかわりができるように，一人一人に対応した時間的な配慮をすることにより，子供は安心して自分の内的欲求を表出できる。

イ　一人一人が自由に活動できる時間の尊重

・子供が自分の進め方で，試行錯誤しながら表現活動ができるように，おおらかな時間設定をする。

②　子供が自由に活動できる場の工夫

ア　想像力をふくらませる場

・イメージが豊かにふくらみ広がるように，また，子供によっては，表現などの具体的な手がかりを摑めるように，教室内外の環境に配慮し，展示・掲示・資料を整える。

・できあがった作品の展示スペースを用意し，飾り方なども作品に応じて工夫させる。

イ　造形的な諸能力を培う場

・必要な時に，必要な用具を選びやすく使いやすいように配置する。

・材料の提供の仕方や机の配置なども子供の実態や題材にあわせて工夫する。

ウ　活動場所への柔軟な対応

・題材に応じて教室以外の場での活動もとりいれる。

③　安心して試しながらつくることなどができる雰囲気や人とのかかわり合いを豊かにする工夫

ア　実態を把握する働きかけ

・子供の感じ方や考え方・表現の傾向を確かめ，把握する。

・実態に即し，題材の選択や授業の導入時における教材の提示の方法を工夫する。

イ　表現を深める働きかけ

・『題名変容カード』などにより子供の思いを理解し，また，一人一人の表現の深まりやつまづきを把握し，適切な支援をする。

・製作の中でも，子供の活動を取り上げたり，子供の言葉を生かして説明する。

・子供の発想が広まりや深まりをもつように，適宜問いかけたり視点やヒントを与える。

・活動の展開の状況に応じて，適切な資料や材料・用具を紹介する。

・子供同士が協力し合えるような活動の機会をつくる。

・『T・T方式』を取り入れることにより，一人一人に対応して，多様な発想や活動に対する，より適切な支援をすることができる。

ウ　表現を高める働きかけ

・『鑑賞カード』・『ここがステキ！カード』などにより，互いの作品のよさを認め合い共感し，さらに自分の可能性に気付き，新たな発想や構想に生かすきっかけとする。

(2)　実態調査について

研究を進めていく中で，「①子供相互の豊かなかかわり合いが減ってきている。②用具を使うことを好むが体験の場が少ない。③流行を取り入れることや新素材に興味が強く，手や足を動かして物をつくることを好む。④自分のつくりたい物がよく分らない。他人の作品のよさも分らない。皆と合わせないと不安になる。」以上のことが問題となった。そこで教師がどのような手だてを取った時，子供は一人一人表したい思いに気付くか，イメージをふくらませていくのか，造形活動過程での手だてと子供の思いの変容を調べた。子供は言葉に表せない思いや心の葛藤，気持ちの変化も絵や立体に表したり表現したりすることで整理ができ自分の表したいことが分ったりする。そこで活動終末時に作品を預かる時

〈いちょうの枝から生まれる、生まれる〉5年・一学級の例

次	一次目	二次目	3次目	四次目	五次目
手立て	・素材とのふれあいの時間 ・材料・用具置場・製作の場の工夫 ・製作への援助 ・助言（作りたい物が変わってもよい）	・子供の発見を生かしテーマについて、考えさせる ・教師の助言し・共感 ・T・T法式	・子供の発見から自分の思いを大切にして創造的につくるとはを確認させる ・T・T方式 ・友達の作品を見合う ・製作活動への支援 ・見本を見せる	・展示場を作る	・友達の作品を見合う ・鑑賞カードに書く
時間	2時間	1時間	2時間	1時間	2時間
子供の題名の変化例	つりざお	竜	竜	竜	竜
	弓	木の塔	木の塔	木の塔	木の塔
	?	?	いかだ	日本のいかだ	いかだ
	弓	のっしー	のっしー	ノッシー	ノッシー
	弓と矢	鹿	鹿	森の中の鹿	森の中の鹿
	鳥	火の鳥	火の鳥	火の鳥	火の鳥とその子
	弓	モアイ	木の王様と子供	森の王様	どこかの石像
	弓	馬	恐竜	竜	ひげの長い竜
	弓	馬	馬	駿馬	体と足が離れる馬
	弓	かめべロ	ピラミッド	バイブルの塔	クリスタルタワー
	弓	ビル	ロボット	ロボット	ロボット
	弓	?	馬	飛竜	竜魔王
	メリーゴーランド	オブジェ	かざるもの	木の公園	木の公園
	?	三輪車	かめ	かめ	空を飛ぶ亀マントのスーパー亀
	?	公園のあそび場	公園のあそび場	公園	公園のあそび場
	小物併け	かわった生物	鳥	鳥	鳥
	鳥	かわった生物	小鳥	鳥	親鳥と小鳥
	リフト	かば	かば	ワニ	ワニ
	小物併け	へビ	へび	てつ模様のあるへビ	へび
	動物	不思議な動物	不思議な動物	動物	いもむし
	小さなブランコ	にょろにょろ	ニョロニョロ	公園とニョロニョロ	ニョロニョロと公園
	小物併け	かべかけ	へび	へび	へび
	小物併け	人形	鳥	鳥	鳥
	ふんすい	?	かご	かご	かご
	家	遊べる家	遊べる家	小人の遊び場	小人の遊び場
	?	おもしろい木	おもしろい木	おもしろい木	おもしろい木
	おもしろい公園	かわいいネコ	おもしろいネコ	おもしろいネコ	おもしろいネコ
	お家	たのしい木	木のアスレチック	木のアスレチック	木のアスレチック
	いかだ	板に丸太をつける	?	鳥	大きい鳥
	体けい場	つるすかざり	いろいろな形	いろいろな形	いろいろな形

つける名札に〈つくったものの題名，つくりたかった夢，気持ちを表す言葉〉《子供の思い》と，〈困ったこと，どうしたか〉《手だて》を記入させて調べた。

以上の結果から，一人一人の思いを生かし多様な表現を引き出すためには，○材料・用具が自由に使える場や資料提示，製作しやすい座席配置の工夫　○一人一人の表現の特性に応じて思いが広がり，イメージが形成される過程でのおおらかな心理的・時間的配慮　○子供相互の認め合い高め合うかかわり合いを支える教師の働きかけが必要であることが分った。さらに，地域の違い，一人一人の表現の特性，年齢の差による特徴などに応じたきめ細かい観察と対応が今後ますます重要である。

(3)　実践授業への問題提起（題材名「叫んでみたら」）

①　題材設定の理由

子供一人一人の思いを生かし主体的な学習を進める一つの手だてとして，言葉にならない思いや意志を引き出し，それを図画工作の場で表現するために六年生に漫画を制作することをとりあげた。子供の発想のヒントとしてポップアートの表現方法を活用することにより，少しでも「子供の側からの表現」が得られればと考えた。

②　授業の流れ

第一次―リキテンスタインの作品のコピーにセリフを入れる。第二次―アイデアスケッチ下絵をかく。第三次―スクリーントーンを使用して構成を工夫する。彩色する。第四次―「本音」「たてまえ」「ごまかし」等の複数のセリフを考え重ねてはる。第五次―作品の鑑賞

③　評　価

雑誌の漫画を写すことを楽しんでいる子供もいたが，意欲的に自分から見通しをもって作品を仕上げていく場面が多く見られた。言葉になりにくいモヤモヤした感情が作品によく表現できており，また意欲的に活動し，友達の作品にも関心をもって接する姿がみられた。スクリーントーンの使用で構成を工夫する手だてとしたが，十分とはいえなかった。

④　感　想

初めにリキテンスタインの作品のコピーに無記名でセリフを入れることで，感情の表出がなめらかになった。また，その他のポップアートの作品にふれることで，子供たちは気負わないで表現の幅を広げていったと思われる。漫画のもつ直接的な感情表現の方法をもっと作品に利用して，子供たちの表現を日常感覚的なものにしていけたらと考えた。

実 践 事 例

① 題材名「ゆめのスポンジック・パーク」　　4学年（B分科会）

1．題材設定の理由

本題材は，恐竜が生息していたジュラ紀時代を想像して，不思議で楽しい世界をスポンジのスクラップを主な材料に使ってつくる題材である。公園の中には動物園，乗り物，博物館や食堂等さまざまなものが考えられる。子供たちの夢や願望を「スポンジック・パーク」にたくして豊かに表現することをねらいとした。事前に実施した子供たちへのアンケート結果によるとスポンジは何かを洗う物，クッションの中身等と思っている。ここで扱うスポンジは製品を作る過程で切り落したスクラップで，大きさ・形・硬さ等さまざまである。切る・まるめる・接着する等加工が容易なので，イメージをふくらませ，一人一人の造形感覚を生かし，夢や願望を形として表現を楽しむことができると考えた。さらに，つくり出した形をアピールするために子供たちが身の回りから集めた材料を付け加える等の工夫もできると考えた。スポンジは，子供たちの日常生活でごく身近なものである。この素材を扱うことによって，身の回りにあるスクラップのような物も表現の材料として改めて見直すきっかけになればと考えた。

2．ねらい

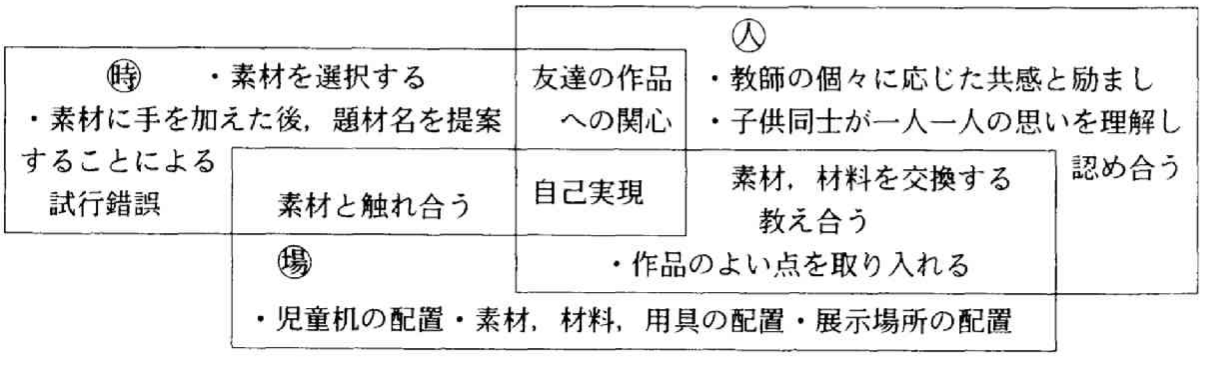
スクラップスポンジを選んだり，組み合わせたり，切ったり，まるめたり，接合したりして，自分の思いをふくらませて表現する喜びを味わう。

3．主な材料・用具

スクラップスポンジ，万能ばさみ，ペンチ，きり，針金，紙類，紐類，竹ひご，接着剤，顔料インクペン，子供たちが付け加えたいと思う物。

4．支援の工夫

子供が思いをふくらませて表現するには，どうしたらよいかを中心に支援を考えた。



5．学習の流れ（6時間）

思いをふくらませて表現する支援の工夫（時間・場・人間関係）

	子供の活動	教師の支援	
多様な感性 ↓ 多様な思い ↓ 多様な活動 ↓ 多様な自己実現	提案1 みんなの力で命を与えて，生かしてほしい。何になりたいのと聞いて，選ぼう。 素材の中に入って，選ぶ。 切ったり，まるめたりしてつくる。	㊥中央に，素材を山にして置く。 用具の配置と，補助材料を紹介する。	表現したいを見つける ↓ 表現できると思う ↓ 決断し製作する ↓ 表現できたと感じる
	提案2 つけたらいいなと思う物を持ってこよう。 つくりたい物，つくりたかった物をカードに書く。（2時間）	㊔素材と触れ合う時間を十分に取る。 ㊉カードは，無理に書かせない。	
	提案3 みんなの作品が集まったら遊園地みたいで楽しいだろう。途中でつくりたい物が変わるかもしれないが，最後に何か楽しい物になるようにしよう。 別の物をつくってもいいのか質問する。 素材を取り換えたり，選んだりする。 前時のつづきをつくる。 できた形から考えて，新しい形をつくり始める。	㊉子供たち一人一人の思いを紹介する。 題材名を説明する。 ㊔前時で使った物やつくった物につけ加えて，イメージが広がるか試すよう助言する。新たにつくることも認める。	
	提案4 つくっている物が，よく分るように他の材料を使って，工夫しよう。 他の材料を選び，つけ加える。 友達の作品を見て，自分の作品に取り入れたりして，工夫する。（4時間）	㊉一人一人の変容をつかみ，適切な言葉をかける。 ㊥必要に応じて，他の材料を選べるよう配置する。 ㊉友達の発想の広がりや，面白さに気づかせる。	
	提案5 できあがったら，飾ってみよう。 もう一つ別な物をつくり始める。 工夫して飾る。 工夫したところを見つける。（6時間）	㊥展示場所を紹介する。 ㊉それぞれの活動や作品のよさを認め，ほめ，励ます。	

6．考　察

素材のスクラップスポンジは，今回，同じ形同じ色の物が比較的多かったので，あらかじめ切断し形を変えて，子供の思いが膨らむことを期待した。素材の量と場所を確保して，素材との出合いとかかわりを大切にしたので，子供たちの興味，意欲がより高められたと思う。硬質でも薄い物は，はさみで切ることができたが，厚みのある物は，教師が帯鋸で切断の援助をする必要があった。両面テープのついている物は，積み重ねる，まるめる，他の物をはさむ等，種々の試みが見られた。第二次で題材名の提案した時，題材名に夢という言葉があったことで，第一次でつくっていた物に対して互いに幅広い認め方ができたようだ。今までつくっていた物をつくり続けた子，別の物をつくって組み合わせた子，全く別の物をつくった子，同じ物をたくさんつくった子等がいた。大きい物同士の接着や，針金，竹ひごを使った組み立てでは，すぐ取れてしまう場合もあり，接着ホットメルトを使って援助した。展示場に飾ることによって，互いの作品を認め合い，更に関連作品の製作に発展していった。展示場所に布や網を用意しておいたので，子供たちは楽しんで作品を飾っていた。帯鋸やホットメルト等危険な用具の扱いや展示の場面では，教師一人で個々の児童の思いに対応しきれない面があり，工夫する必要がある。また，子供同士が思いや活動を認め合うことが，表現意欲を触発する要素となっていることを感じた。子供同士の会話やかかわりをみとり，授業の中でどう生かしていくか考えていかなければならないと思った。

①

②

③

写真　①気に入った素材を選ぶ
②独創的な思いつきも……
③熱心に製作中

② 題材名「いちょうの枝から生まれる生まれる……」　5学年（B分科会）

1．題材設定の理由

いちょうの枝（自然木）を使った造形活動である。板や角材のように一定の形に加工されたものと異なり，自然木は複雑な形状と材質をもっている。「いちょうの枝から生まれる生まれる……」の題材名にも示すように，単なる材料としての発想でなく，枝のもつ形からの発想や，用具を使い「接合方法」を工夫して組み立てていく中からの発想を大事にしたい。そうすれば一人一人の思いや表現も，多様に引き出せるのではないかと考えた。

また，自然体験の少ない子供たちに，自然の木への関心を深め，何気なく見過している自然の中に，美しいものや興味深いもの，そして創造につながる素材がたくさんあることに気付かせたい。

多様な用具にかかわらせながら，切る・削る・割る・曲げる・折る・剝ぐ・束ねる・繋ぐ・彫るなどの多様な操作を楽しませたいと思い，本題材を設定した。

2．題材のねらい

自然木のよさに触れながら，自分の考えを生かした作品つくりを楽しむ。

3．主な材料・用具

いちょうの枝・木工用具類・くぎ・針金・ひも類・ボンド・子供が用意した加えたい材料

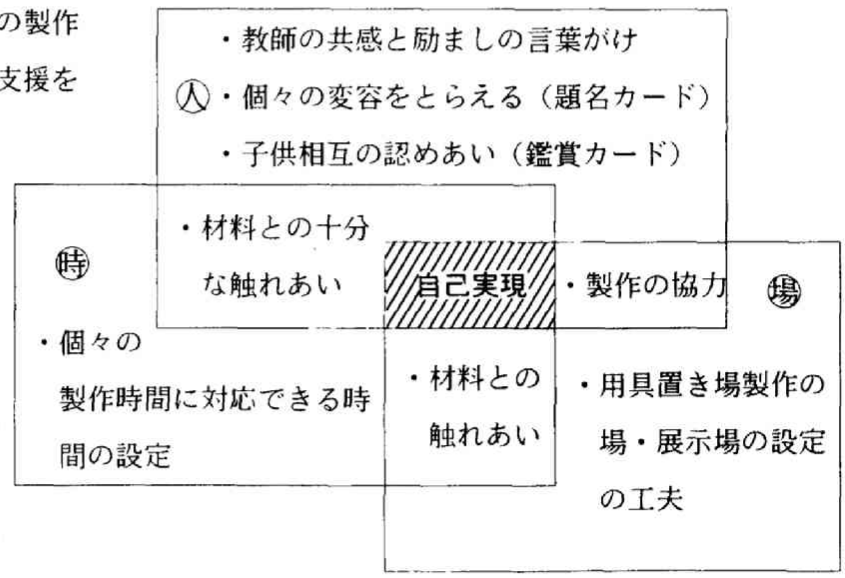
4．支援の工夫

子供の多様な表現を引き出しその表現を支え，その製作時間を尊重する教師の支援を三つの視点から考え，子供の表現に応じて弾力的に行う。

① 子供の多様な活動に対応できる弾力的な時間設定の工夫。―㊗

② 子供が自由に活動できる場の工夫。―㊝

③ 安心して試しながらつくることなどができる雰囲気や人とのかかわり合いを豊かにする工夫。――㊥



5．学習の流れ（6～8時間）

多様な表現を引き出す支援の工夫（時間・場・人間関係）

	子供の活動	教師の支援
第一次 2時間	（表現への思いをもつ） ・いちょうの木と触れ合いながら，つくりたいものを考える。	㊖ 素材と自由に触れ合う時間を十分に取り，多様な感覚を刺激しながらつくりたいことがはっきり自覚されていくようにする。
第二次 3～5 時間	（創造的な表現活動） ・「自分の思いを大切にして，創造的につくる。」というめあてを，子供自身の言葉で理解する。 ・自然木のもつよさを生かしながら作品づくりを楽しむ。 ・枝と枝の接合方法を工夫したり，他の材料を加えたりしながら，さらに表現を深める。	㊙ めあてを分かりやすく，子供たち自分の言葉でつかませるようにする。 ㊗ 教室の中に製作する場・用具置き場をつくり，子供一人一人が必要なものを選んで主体的に製作に関わっていく場の設定をする。 ㊙ 活動終末時に子供が記録した「題名カード」をみて，一人一人の変容をつかみ，適切な言葉がけをする。
第三次 1時間	（互いのよさを認め合う） ・班の友だちの作品を鑑賞し，そのよさを認め合う。 ・作品にあった展示場所，方法の工夫をする。 ・作品の完成の喜びを味わい，次の製作への新たな意欲をもつ。	㊙ 「鑑賞カード」を用意し，子供が互いにそのよさを認め合い，高め合えるようにする。 ㊖ 子供の作品への思いを大切にし，展示後も，補充の製作を認め，励ます。

6．考　察

「多様な表現を引き出す」要素が，その題材にどれだけ準備されているかが大切な点である。この題材では，①自然木のもつ材質・形・色の多様性　②多様な用具の使用　③個々の子供の製作に合わせた弾力的な時間設定　④多様な用具，製作の場の主体的な選択　⑤個々の子供の多様な変容をとらえる手だて（題名カード）　⑥多様なよさに共感する手だて（鑑賞カード）　⑦展示場の用意　等の準備をした。

導入時の，いちょうの木を提示された子供たちは，「これから何がつくりたい？」という問いかけに，男子は弓，女子は小物掛けという題名が圧倒的に多かった。その後，木と触れ合う時間を十分に与え，「自分の思いを大切にして，創造的につくる」というめあてを，子供自身の言葉でつかませるようにしたところ，自然木のもつよさを生かしながら作品づくりを楽しむようになってきた。活動終末時には題名カードを配り，子供の思いの変容やつまづき等を知り個々に対応した適切な支援をすることができた。木と木の接合方法や，葉や他の自然素材との接着方法，木を自分の使いたい寸法に切ることなど，個々の製作手順に合わせて，材料・用具も子供自身が選び，使いやすいように準備した。また，机の配置を工夫し製作の場を用意した結果，子供は自由に多様な活動を展開した。できあがった作品を空間に吊したり台の上に置いたりできるような場を用意して，友だちの作品を鑑賞できるようにしたところ，それに影響を受け，発想を広げたり転換したりする様子も見られた。

今後の課題としては，子供同士がお互いに高め合い，安心して試しながらつくるなどができる雰囲気をつくりだす支援のあり方を研究する必要があると思われる。また，用具等を子供が選んで使用するということで，安全面からもＴ・Ｔ方式の研究が必要になってくるであろう。

自然木の形状から発想した作品
←「ひげの長いりゅう」

↑木の葉のついた枝をうまく使って表現した作品
「火の鳥」

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

○　子供の内面への刺激から感性を十分に働かせる題材設定の工夫により，一人一人の多様な感覚を通して物の性質に深くかかわることで，造形的なイメージが広がり多様な表現へと結びついていった。

○　表現の可能性が幅広い題材を提案することにより，子供が自ら主題や素材，表現の内容や方法を選択し，自分なりの表現を楽しみながら思いを深めていくことができた。

○　素材との出会いの場を工夫し，活動の自由性を尊重することにより，子供が新たな発見や体験をすることができ，自らの表現に広がりや深まりをもつことができた。

○　素材に触れるなどのかかわりを深める時間を確保することや，子供の考えで安心して表現活動を進められる時間を十分尊重することにより多様な試みや表現を引き出すことができた。

○　表現活動の過程に応じた場の工夫をすることにより，表現の具体的な手がかりがつかめ，自分の思いを生かした表現をすることができた。

○　子供の発言を生かしながら問いかけをすることにより，表現する意識が深まっていき，自らのよさに気付き，楽しいものができたという満足感を味わうことができた。また友達とのかかわり合いの中で互いに触発され，意欲的に造形活動を行うようになった。

2　今後の課題

○　多様な表現を引き出すための題材を工夫するためには，教師は一人一人の子供の感性を大切にすると共に，その小さな表れを見逃さぬように子供に寄り添い，共感しながら子供の自由な活動を温かく見守ることが大切であり，必要なことである。

○　一人一人の子供の多様な表現には十分適切な対応ができないところがあった。十分な時間の尊重，用具の安全指導，そして一人一人の子供をみとっていくには学級担任との連携が大切であり，Ｔ・Ｔ方式など教師の協力的な教授方法を取り入れていくことも必要である。

今回の研究では直観的で渾沌とした子供の内面の世界にある思いを生かし多様な造形表現を引き出す「題材」の工夫と，子供の創造的で多様な造形活動を導き出していく教師の「支援」の在り方の追究がなされた。二つの分科会における取り組みを相互関連させ深めていくことで子供一人一人の夢や希望をのせた多様な造形表現が実現することが分った。今後も子供の思いをみとり，そのよさを生かしていける授業づくりを追究したい。